

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-181053

(P2002-181053A)

(43)公開日 平成14年6月26日(2002.6.26)

(51)Int.Cl.*

F 16 C 33/58

識別記号

F 1

F 16 C 33/58

テ-マート*(参考)

3 J 1 O 1

審査請求 未請求 請求項の数2 O L (全6頁)

(21)出願番号

特願2000-378498(P2000-378498)

(22)出願日

平成12年12月13日(2000.12.13)

(71)出願人 000004204

日本精工株式会社

東京都品川区大崎1丁目6番3号

(72)発明者 村井 隆司

神奈川県藤沢市鶴沼神明1丁目5番50号日

本精工株式会社内

(74)代理人 100089381

弁理士 岩木 謙二

Fターム(参考) 3J101 AA13 AA24 AA32 AA42 AA62

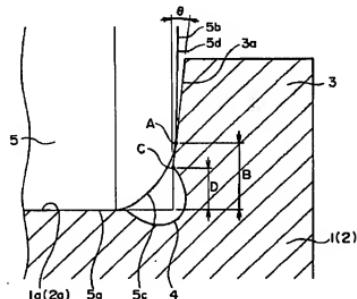
BA53 BA54 BA56 FA33

(54)【発明の名称】 ころ軸受

(57)【要約】

【課題】 ころ端面の面取り部(チャンファ)と平面部との交点位置と、外輪・内輪の鋼面と研削用逃げ部との交点位置との位置関係を調整することにより接触部の耐焼付き性能を向上せしめたころ軸受を提供することである。

【解決手段】 ころ端面5 bの面取り部5 cと平面部5 dとの交点位置Aを、鋼面3 aと研削用逃げ部4との交点位置Cよりも、外輪鋼部3では半径方向大径側で、内輪鋼部3では半径方向大径側とすることにより、転がり接触部におけるころ5と鋼面3 a内に油膜を確実に形成させ焼き付き防止または減緩出来る。



(2)

【特許請求の範囲】

【請求項1】 ころ端面の面取り部と平面部との交点位置が、鉄面と研削用逃げ部との交点位置よりも、外輪鈎部では半径方向小径側か同位置で、内輪鈎部では半径方向大径側か同位置としたことを特徴とするころ軸受。

【請求項2】 少なくとも外輪と内輪のいずれか一方若しくは双方における鉄面と研削用逃げ部との交点位置が、ころ軸動面と転がり接触する外輪若しくは内輪の軌道面と、外輪鈎部では同径か大径側、内輪鈎部では同径か小径側になることを特徴とする請求項1に記載のころ軸受。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、一般機械、特に潤滑油量等に制限がある箇所に使用されるころ軸受や、潤滑装置が障害としても直ちに焼き付きを生じさせない様に焼付性向上を要求される円筒ころ軸受や円錐ころ軸受の改良に関するものである。

【0002】

【従来の技術】 本発明に関係する、ころ軸受の焼き付き防止または低減技術としては、ころと鉄部の接触面同士の粗さを向上させたり、接触面の位置をころの軸動面と外輪（または内輪）の軌道面と同じ半径位置で接触させることによって、ころ端面と鉄部の滑りの影響を小さくする事が考えられる。

【0003】 例えば、特開平7-42746、特開平7-91452などに見られるように、接触するころ100の端面101と鉄部200の接触領域に複数の微小凹部201を設けて油膜形成維持を図るもの（図9）がある。また、特開平9-236131のように滑りによる発熱低減を狙い、ころ100が鉄部200と接触する位置をころの外端面102と同じになるように、ころ100の形状を変えたもの（図10、図11）などがある。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 しかしながら、上記のように粗さの改善や任意な加工目を設けることは、特殊な加工設備や加工時間の延長に伴うコストアップ問題および品質の安定性などに課題があった。一方、ころの形状をかえることによる対策においてもころの加工に伴うコストアップや内輪の加工追加によるコストアップが考えられる。

【0005】 そこで、本発明者は次の点に着目し本発明の完成に至った。外輪（または内輪）の鉄部は、軌道面鉛直方向に対して潤滑油を接触部に入り易くするため、ある角度分離いて形成されているのが一般的である。従って、鉄面内に設けられる研削用逃げ部との交点が幾何学的に最もころ端面と接触し易くなっている。一方こ

2

においては、ころ外径部（軸動面）と鉛直に端面が形成されているため、軸動面と端面をつなぐ面取り部（チャンファともいう）の、端面との交点が幾何学的に最も鉄面と接触し易くなっている。また、接触部周辺にある潤滑油は、その粘性により小さな隙間に引きずり込まれるため、接触部周辺の形状は、鉄面ところ端面部は、徐々にすきまが接近するのが望ましく、それは、從来ころの端面にクラウニングを実施し、接触部の油膜を確実に形成させ焼き付き性能向上を可能にしている例からも伺える。

【0006】 本発明は、從来技術の有するこのような問題点に鑑みされたもので、その目的とするところは、ころ端面が外輪と内輪のいずれか一方若しくは双方の鉄部と転がり接触するものにおいて、ころ端面の面取り部（チャンファ）と平面部との交点位置と、外輪・内輪の鉄面と研削用逃げ部との交点位置との位置関係を調整することにより接触部の耐焼き付き性能を向上せしめたころ軸受を提供することである。

【0007】

【課題を解決するための手段】 上記課題を達成するため

に本発明がなした技術的手段は、ころ端面の面取り部と平面部との交点位置が、鉄面と研削用逃げ部との交点位置よりも、外輪鈎部では半径方向小径側か同位置で、内輪鈎部では半径方向大径側か同位置としたことである。

【0008】 上記ころ軸受において、少なくとも外輪と内輪のいずれか一方若しくは双方における鉄面と研削用逃げ部との交点位置が、ころ軸動面と転がり接触する外輪若しくは内輪の軌道面と、外輪鈎部では同径か大径側、内輪鈎部では同径か小径側になるものとした。

【0009】

【発明の実施の形態】 以下、本発明軸がり軸受の一実施形態を図に基づいて説明する。図面は、外輪1と、内輪2と、外輪1と内輪2との間に多数組み込まれる円筒ころ5と、該ころ5を等間隔に案内保持する保持器6とから構成されている円筒ころ軸受で、基本的構造を周知の円筒ころ軸受と同一とするものである。図面は、NJTタイプとNUタイプを代表例として説明するが、本発明はころ端面5bが外輪1と内輪2のいずれか一方若しくは双方の鉄部3と転がり接触するころ軸受全般において適用可能で、特に図示例に限定解釈されるものではない。なお、本実施例では、円筒ころ軸受について説明するが、当然、円錐ころ軸受における内輪大鈎部ところの関係についても同様なことが言えるのは言うまでもない。

【0010】 外輪1と内輪2のいずれか一方若しくは双方は、両端部若しくは一端部に鉄部3を有し、該鉄部3に転がり接触するころ5の端面5bの面取り部5cと平面部5dとの交点位置A（ころ交点高さB）が、端面3aと研削用逃げ部4との交点位置C（鉄面逃げ高さD）よりも、外輪鈎部3では半径方向小径側か同位置で、内輪鈎部3では半径方向大径側か同位置となるよう設定す

(3)

3

る。すなわち、ころ交点高さBが鈎面逃げ高さDよりも高く設定される。ころ交点高さBが鈎面逃げ高さDよりも高く設定されるものであれば、ころ交点高さBと鈎面逃げ高さDは特に限定されることなく本発明の範囲内で任意に設定される。また、鈎開き角(θ)も任意である。

【0011】また、上記構成と共に、次の構成を加えることも本発明の範囲内である。外輪1と内輪2のいずれか一方若しくは双方における鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置C(鈎面逃げ高さD)が、ころ転動面(外径面)5aと転がり接触する外輪1若しくは内輪2の轨道面1a、1b径と、外輪鈎部3では同径か大径側、内輪鈎部3では同径か小径側になるものとする。

【0012】

【実施例】「実施例1」試験軸受として、外輪1は両端に鈎部3、3を有し、内輪2は一端に鈎部3を有するNJタイプの円筒ころ軸受で、外輪1・内輪2(逃げ部4を共通)および保持器6については、図2に示す実施例1および図3に示す比較例と共に共通にした。ころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと平面部5dとの交点位置Aが、外輪1および内輪2の鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置Cよりも、外輪鈎部3では、半径方向小径側で、内輪鈎部3では、半径方向大径側で接触するもの(実施例1)と、鈎面3aとの接触位置をころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと平面部5dとの交点位置Aが、外輪1および内輪2の鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置よりも、外輪鈎部3では、半径方向大径側で、内輪鈎部3では、半径方向小径側で接触するもの(比較例)について、下記条件の下に接触位置での影響を確認するために回転評価試験を行なった。

【0013】<条件>

試験軸受	NJ 3 0 8
回転数	0-8000 min ⁻¹
アキシャル荷重	3 9 2 N
ラジアル荷重	9 8 0 0 N
油浴潤滑	V G 6 8
外・内輪鈎面研削逃げ高さ	0.6 mm (内・外輪共通)

(実施例1)

ころ端面の面取り部(チャンファ)と平面部の交点高さ位置 0.8 mm

(比較例)

ころ端面の面取り部(チャンファ)と平面部の交点高さ位置 0.4 mm

【0014】<結果>実施例1のように、鈎面3aとの接触位置をころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと平面部5dとの交点位置Aが、外輪1および内輪2の鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置Cよりも、外輪鈎部3では、半径方向同じか小さい側で、内輪鈎部3では、半径方向同じか大きい側で接するころ5(ころ交

点高さB:0.8 mm、12個)を使うと、温度上昇は低く抑える事が出来るが、比較例のように、ころ交点高さBが0.4 mmのころ5を使うと極端に温度が上がる。その結果を図4に示す。

【0015】すなわち、図2に示す実施例1において、鈎面3aところ端面5bが接触する位置を見ると、ころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと平面部5dとの交点位置Aが、外輪1および内輪2の鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置Cよりも、外輪鈎部3では、半径方向小径側で、内輪鈎部3では、半径方向大径側で接する(図2)、接触位置を挟んで半径方向小さい側では、鈎面3aは、ある開き角度で接近しており、反対側(半径方向大きい側)は、鈎面3aの開き角度θところ5の面取り部(チャンファ)5cのRとの相対すきまで接近するため、すきまが小さい部分では潤滑油を接触部に引きずり込み易く(くびり効果)なり、その結果油膜形成が確実にでき耐焼付き性能を向上させることが出来ると考えられる。なお、外輪鈎部3・内輪鈎部3と共に、ころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと

平面部5dとの交点位置Aと、外輪1および内輪2の鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置Cが半径方向同位置で接する場合も同様に油膜形成が確実にでき耐焼付き性能を向上させることが出来る

【0016】一方、図3に示す比較例において、鈎面3aところ端面5bが接触する位置を見ると、ころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと平面部5dとの交点位置Aが、外輪1および内輪2の鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置Cよりも、外輪鈎部3では、半径方向大きい側で、内輪鈎部3では半径方向小さい側で接すると(図3)、接触位置を挟んで半径方向大きい側では、鈎面3aは、ある開き角度θで接近するが、反対側は(半径方向大きい側)鈎3の研削用逃げ部4の為、ころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cのRには関係なく極端にすきまが増大する為、潤滑油を接触部に引きずり込む事が困難となり、その結果油膜形成が難しくなる分確実に耐焼付き性能を低下させると考えられる。

【0017】「実施例2」図5に示すような外輪1に鈎部3を有し、内輪2には鈎部3を有しないNJタイプの円筒ころ軸受の外輪鈎面3aと研削用逃げ部4との交点位置Cを、ころ転動面(外径面)5aと転がり接触する外輪軌道面1b径と同径になる様に研削用逃げ部4を設けたものに、ころ端面5bの面取り部(チャンファ)5cと平面部5dの交点高さBが、実施例1で使用した0.4 mmのころ5を用い(図6)、その影響を確認した。その幾何学的関係を図7に示す。

【0018】<条件>

試験軸受	NJU 3 0 8
回転数	0-8000 min ⁻¹
アキシャル荷重	3 9 2 N

(4)

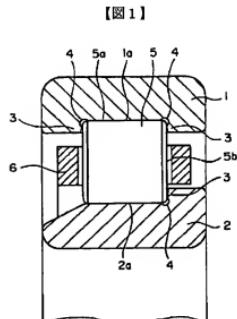
ラジアル荷重 9'800 N
油浴潤滑 VG 68
外・内輪鋼面研削逃げ高さ 0 mm (内・外輪共通)
ころ端面の面取り部 (チャンファ) と平面部の交点高さ
位置 0, 4 mm

【0019】〈結果〉実施例1では、ころ5の端面5 bと面取り部 (チャンファ) 5 cと平面部5 dの交点高さBが0, 4 mmのものは、同じ交点高さBが0, 8 mmのころに比べ、温度上昇は高かったが、本実施例で、鋼部3との交点Cとなる逃げ部高さDをころ転動面 (外径面) 5 aと転がり接触する外輪軌道面1 a径と同径にすることによって、ころ端面5 bの面取り部 (チャンファ) 5 cが小さく出来、面取り部 (チャンファ) 5 cところ端面 (平面部5 d) の交点位置A (交点高さB) が小さく出来る (外輪軌道径に近づく)。その結果、ころ5と鋼部3での滑り摩擦を軽減でき、それによって温度上昇が抑えられることが分かる。

【0020】

【発明の効果】本発明は、ころが外輪もしくは内輪の鋼部と転がり接触する位置において、ころ端面部のチャンファと平面部との交点位置が、外輪および内輪鋼面と研削用逃げ部との交点位置よりも、外輪鋼部では、半径方向同じか小さい側で、内輪鋼部では、半径方向同じか大きい側で転接することによって、転がり接触部におけるころと鋼面内に油膜を確実に形成させ焼き付き防止または低減出来る。また、ころ端面と鋼部の接触位置をころ転動面 (外径面) と転がり接触する内・外輪軌道面径近傍に出来ることにより、滑り摩擦を軽減でき、軸受温度上昇を抑える事が出来る。

【図面の簡単な説明】



【図1】

(4)

【図1】本発明ころ軸受の一実施例を示す断面図。
【図2】実施例1におけるころ端面と鋼部との幾何学的接觸関係を示す図。
【図3】比較例におけるころ端面と鋼部との幾何学的接觸関係を示す図。

【図4】実施例1と比較例とにおけるころ端面と鋼部との接觸位置による影響を確認した試験結果を示す図。
【図5】本発明ころ軸受の他の実施例を示す断面図。
【図6】実施例2におけるころ端面と鋼部との幾何学的接觸関係を示す図。

【図7】実施例2におけるころ端面と鋼部との接觸位置による影響を確認した試験結果を示す図。

【図8】従来技術を示す断面図。

【図9】従来技術の他の形態を示す断面図。

【図10】従来技術の他の形態を示す断面図。

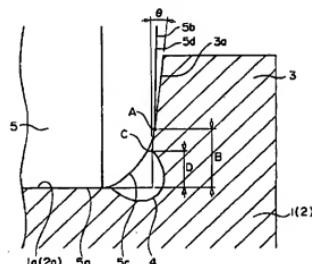
【図11】従来技術の他の形態を示す断面図。

【符号の説明】

- 1 : 外輪
- 2 : 内輪
- 3 : 鋼部
- 4 : 研削用逃げ部
- 5 : ころ
- 5 b : 端面
- 5 c : 面取り部 (チャンファ)
- 5 d : 平面部
- A : 面取り部と平面部の交点位置
- B : ころ交点高さ
- C : 鋼部と研削用逃げ部の交点位置
- D : 逃げ部高さ

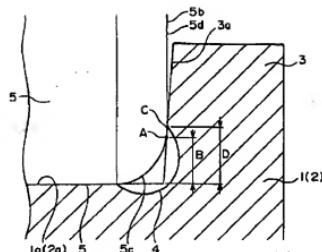
30

【図2】

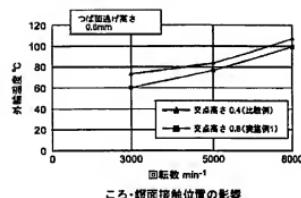


(5)

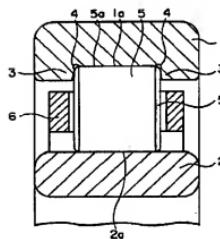
【図3】



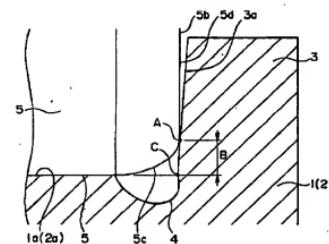
【図4】



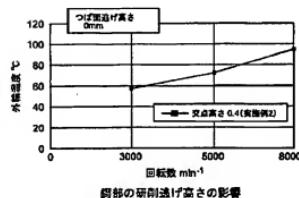
【図5】



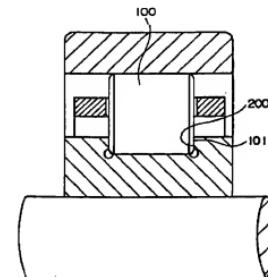
【図6】



【図7】

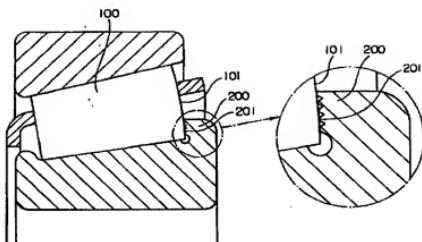


【図8】

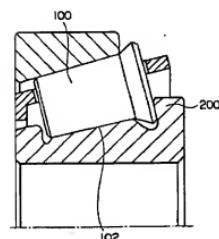


(6)

【図9】



【図10】



【図11】

